



萩原みか



高橋照美

萩原みかソプラノ・リサイタル

オペラでも活躍中の萩原みかが昨年からは開始したシリーズ「coiers」の第2回。幕開けは『この道』『城ヶ島の雨』『ペチカ』『からたちの花』の耕稼歌曲4曲。いずれも著名曲だが、日本語の抑揚を大切にした

平井秀明オペラ「かぐや姫」全2幕演奏会形式（衣装付）

コンポーザーコンダクター平井秀明が久方ぶりに東京で自作を振った。演出・田尾下哲。かぐや姫・永安淑美、帝・豊島雄一、翁・立花敏弘、姫・管有実子、かぐや姫合唱団。簡

高橋照美 ソプラノ・リサイタル

ヴェテランの滋味を様々な形で聴き取った一夜。ソプラノ高橋照美の美点は、第一に拙速に陥らぬ歌運び、次にフランス語の明晰な発音、そして声を「押さない」姿勢と思う。前

丁寧な歌唱はあらためて名歌の名歌たるゆえんを知らしめる。次いで橋本国彦『雨の道』をピアノの長町順史が独奏。再び萩原が登場して中田喜直『未知の扉』『鳩笛の歌』『わらい』で哀悼、決意、追憶、哀惜、憧憬といった人間の心模様をその奥ひ

だに届くまで繊細に表現したのち『歌をください』で愛と希望のメッセー지를投げかけた。第2部は語り歌曲。猪本隆『さざんか』『あなた』で親密な語りかけがなされ『なみだ』でクライマックスが築かれた。ここで最近出版された畑中良輔のピアノ

佳品『前奏曲第7番』を長町が独奏。気分一新後、小林秀雄『飛騨高原の早春』が春の光のようなアルペジオにのせて美しい発音で歌われ、『瞳』『すてきな春に』『山茶花』が続いた。（11月2日 市ヶ谷ルーテルセンター）
（萩谷由喜子）

素な舞台に木管&ピアノ五重奏による演奏。木管偏重のせいか序曲はコシ風に飄々として聞こえる。この作は平井が米留学中に書き始め次第に膨らみオペラとなったもの。順次に改訂され練りに練られた結果、説得力と魅力を一段と増した。今回久し

ぶりで耳にしたが登場人物が一人歩き出したのには驚いた。かぐや姫の恋のライバルの娘（九嶋香奈枝）が会場を縦横無尽に動き回り、狂言回し？ 公家（晴雅彦）の「ホッ」という仕草が満員の聴衆を沸かせる。或いは大納言との凸凹コンビも面白

いかも。求婚者への課題の宝物鑑定の際の子供達の「偽物だあ」という声も印象的。こういったナイスな脇役達が主役を食ってしまうような活躍で魅せれば何かが生まれ、或いは「夕鶴」を超える可能性も？（11月3日、渋谷聖ヶ丘教会）
（浅岡弘和）

半ではベルリオーズの〈君なくて〉の〈還り来よ！ Reviens!〉が一際豊かに鳴りわたり、ピアノのダルトン・ポールドウインの硬質の音色も透明感を一層増した。後半ではプーランクの歌曲集〈くじびき〉からの抜粋が出色の出来。（おねむ）での鼻

母音の精妙な響き、（ハートのクイーン）の優美で幻想的なフレージング、〈四月の月〉の緩やかな美感がそれぞれ著しい情趣を表出。また、サティ〈あなたが欲しいの〉での丁寧かつ品の良いフレージングも好感触。掉尾を飾る中田喜直の〈木の匙〉からは

バリトン佐藤光政との軽妙なやりとり（妻の童話）を経て、ソロの〈悲しくなったときは〉の肌理細やかな歌いぶりに感じ入った。ポールドウインの冴えた音作りにも脱帽。（11月10日、市ヶ谷ルーテルセンター）
（岸 純信）